

第七話 六年後（後編）

夏の暑さも少しは角が取れ、^{かど}昼の長さと夜の長さがほぼ同じくらいになった、とある祝日。

……九月の、二三日。

「間取りは1LDK。このリビングをオフィスにして、隣の部屋を女性用の仮眠室兼更衣室に。もちろん浴室も完備だから、泊まり勤務もOK！」

「はいはい、ブラック乙」

「……まあ極力そういうことはないよう社長としては努めたいが、マスターアップ前でも同じことが言える自信がまだない」

駅にほど近い、とあるマンションの五階。

まだ空室の、がらんとしたリビングからは、^{いけぶくろ}池袋の街が一望……というほどでもないが、まあそこそこは見渡せた。

「で、どうかな？ 俺はここに決めようと思うんだナど……」

「波島君の意見は？」
はしま

「伊織は俺たち二人に任せるって言ってる」
いおり

「ふうん……」

『株式会社 blessing software』代表取締役社長、^{あきともや}安芸倫也。取締役副社長、^{かとうめぐみ}加藤恵。

そんな、零細ゲーム開発企業の代表権を持つ二人は今、^{倫也の部屋}安芸家二階に代わる新オフィスの視察に余念がなかった。

「でもさ、ここ立地もいいしリビング広いし、家賃、結構するんじゃないの？」

事前の情報をあまり得ていなかった恵が、分厚い物件資料の束を素早くめくりつつ、費用関係のページを探す。

……実は、今朝になって突然、倫也に『新オフィスの物件を見て欲しい』と言われ、とりあえず『そういうのって事前の報告、連絡、相談が大事なんじゃないかなお?』と、さんざん説教した後だというのは今は置いておく。

「とりあえず、ここの家賃一年分と敷金、礼金、それにオフィスとして立ち上げるための諸費用を算出してみた」

「それで?」

「……この前マルズから受け取った報酬がほぼ全部消える」

「……………社長」

その資料の最後のページにあった、自分の想定とちよつとだけ桁^{けた}の違う数字を目にした瞬間……

恵は、しばらく額に手を当てて心を落ち着けると、久々に瞳孔の開いた目で倫也を冷たく見つめた。

「だ、大丈夫大丈夫! ほら、会社の利益がなくなれば法人税もなくなるし!」

「ついでの信用もなくなって銀行からお金借りれなくなるよ?」

なおこの恵の発言は大げさに聞こえるかもしれないが事実なので読者諸兄も気をつけていただきたく。

「そ、そんな訳で今から経営会議だ! ミーティングするぞ恵! なんと少しでも新しい企画を早急に立ち上げて、会社の安定した運営を……」

「って、どうしてもここを借りること前提なの? もう少しお金溜まるまで待つとか、もう少し小さくて安い物件にするとか……」

「いいや、今でなくちゃ……ここでなくちゃ、ならないんだ」

「……………」

倫也の、その強情な言い分に、恵は……

『……だったらわたしに相談なんかせずに関自分で勝手に決めちゃえばいいんじゃないか

なあ?』などと思わず口をつきそうになったが、もしそんなことをすると、同僚たちに地雷女とか重い女とかはやし立てられるのは明白なので、ぐつと言葉を飲み込んだ。

「それに、もうオフィスのレイアウトまで作ってあるんだ! ほら!」

「だから、そんなもの見せられても……あれ?」

で、恵がそこまで我慢しているのに、まだ自分の意見をゴリ押ししてくる倫也に呆れつつ、それでもその図面に目を通した恵は……

「机が、七つ……?」

そこに、ちょっとした違和感を覚え……

「……だから、このくらいの広さがないと、いけないんだ」

「……あ」

けれどすぐに、深く深く、理解した。

「次の企画には、外部のクリエイターを招聘する。

……詩羽先輩 英梨々超大物作家と、神絵師だ」

彼が、本当に求めているものを。

「金はまた、なくなっちゃうけど……でも、ユーザーや業界からの信頼は、残ってる」

それはどちらも、実質的には、たった半年で手に入れたものだけだ。

「だから、いよいよ来年は、『株式会社 blessing software』、大飛躍の年だ!」

それでも、何年も何年もかけて、必死で頑張って、ようやくたどり着いた“坂のてっぺん”で……

「そういうの、ずるいよ……」

「ごめん」

「そういうこと言われたら、反対、できないよ」

「ごめんな」

威勢のいいことを吹いておきながら、すぐに小動物のようにおびえた表情でこちらを伺うその態度に、何度騙されたことか。

……まあ、恵の場合、そういうふうに騙されるのが全然嫌じゃないから、結局、改まることはないのだけれど。

「夢、叶えにいくんだね。勝負に、いくんだね」

「まあ、あの二人が請けてくれるかという問題はあるけどな」

「二人とも、超売れっ子だもんね」

「……断られたら、どうしよう？」

「そうだなあ、空いたスペースに大きめのテーブル置こうか？　今のままだと会議スペースがないし」

「いや、そういうことじゃなくてね……」

と、そうやって、苦笑したまま見つめ合えば、いつも通りのめでたしめでたし……

「じゃあ、決めちゃおうか？　確かに、いつまでも倫也くんの部屋で仕事してても、ご両親に悪いし」

「まあ、ウチの親は、とつくに諦めてると思うけどな……」

いや……

「とりあえず、早めに押さえといた方がいいよね？　今から不動産屋さんに行って、手付金だけでも……」

「い、いや、ちょっと待って」

「倫也くん？」

「実は、もう一つ……見てもらいたい物件が、あるんだ……」

今日の、本当の、めでたしめでたしは……
まだ、ほんの少しだけ、先の方に、ある。

※ ※ ※

「リビングはさっきのところより狭いけど、こっちは大人数じゃないし、いいかなって」

「……………」

先ほどの物件から、徒歩一〇秒。

玄関を出て、廊下を数歩歩いて、最初に見つけた扉を開けて。

「その代わり、部屋の方はそこそこ……とりあえず大きな目のベッドを入れられるくらいはある」

そしたら、さっきの部屋と似たような景色が広がる、ほんの少しだけ間取りの違う1LDK。

「……まあ、職場に近すぎるってのは、メリットでもありデメリットでもあるけど」

つまりそれは、隣の部屋。

「ちょ、ちょっと待って？　ここ……っ」

その部屋に招かれてから、恵は、三分ほど言葉を失っていたけれど……

はっと我に返り、倫也を問い詰めようとその顔を見上げ、そしてまた、一瞬、言葉に詰まる。

「……恵と、俺の部屋」

「っ……」

彼の、あまりにも緊張して紅潮した、そのガチガチの表情に、今さら気づいたから。

そして、そのガチガチの表情から発せられた、震える声が奏でる意味に、一瞬で思い至ってしまったから。

「え、え、ええと……」

「は、ほら、恵もさっき言ったじゃん？　いつまでも家にいても、親に悪いって」

「と、とっくに諦めてるって、倫也くん言ったよ？」

「反対……？」

「そ、そういうことじゃなくて……全然、そういう話じゃなくってさあ……っ」

自分が思った以上に動揺していることに、恵が、さらに動揺する。

「その、だって、こっちは、会社のお金、使えないよね？　倫也くん、どこにそんなお金……」

「まあ、同人時代の稼ぎとか、学生時代のバイト代とか、結構、貯めてたから……」

「だったらもっと服買いなよオタクグッズばかりじゃなくてさあ！　わたしなんかすぐ服とか靴とかで貯金なくなっちゃうよ？　倫也くんがそんなに貯めてるなんて想定外だよ！」

「いや、今してるのはそういう話じゃ……」

「と、とにかく、とにかくさあ……っ」

動揺して、動揺して、動揺しまくって……

どんどん、どんどん、テンションが滅茶苦茶に、なっていく。

それはまるで、あの、フラグを折らなかった彼女初めての喧嘩の、仲直りの時、みたいに。

「まあ、でも、さすがにここを借りて、家財道具とかは入れると、貯金の九割が消えちゃうんだけどな」

「や、やっぱり駄目だよそれ……一割しか残らなかったら、漫画やアニメの円盤、買えなくなっちゃうよ？」

「いいや、それどころか……」

でも、倫也からしてみたら、ここで動揺されては困るわけで。

だって……

「これで、全部消えた」

「あ……」

この、小さな小さな箱指輪を取り出す瞬間こそが……

彼が、本当に、彼女に、反応して欲しかった瞬間、なのだから。

「え、えっと……今の、結構決まったと思うんだけど、どうかな？」

いつもの恵なら『そういうこと言わなければね』なんて、流せたかもしれない。

「た……誕生日、プレゼント？」

「……悪いけど、誕生日を祝うだけだと、完全に債務超過」

「う……」

「だから、それ以上の下心があるって、ちゃんと理解していただきたく」

「あ、あのね、あのね……」

恵は、今この瞬間、思い知った。

自分のことを、過大評価していたと。

「今日から、一つ年上になったから言わせてもらうけどね……っ」

「そんなの、三か月ですぐ元に戻るじゃん加藤先輩……」

もし、偷也から、こんな申し出があったとしても、ちゃんと事前に察知して、はくらかせるはずだった。

だって彼は、もしそんな、一世一代の告白をするとなったら、思いっきり緊張して、声が裏返って、バツが悪そうな表情になるに決まっているから。

だから自分は、彼の次の言葉を十分に予測して、心の中で、ちょっと笑って、十分に余

裕をもって迎え撃てるはずだって。

「い、今の今まで仕事モードだったよね？　そういう話、する雰囲気じゃなかったよね？」

「け、けど、恵って、そんなに雰囲気、気にするタイプだったっけ？」

「さすがに気にするでしょ一生に一度なんだよこんなの！」

けれど今日は、まず最初に、自分に何の相談もなくオフィスを決めてきたといふやらかしら”があつて。

しかも今日は、自分の誕生日だから、少しばかり緊張していても、『ああ、サプライズ仕込んでるんだな』なんて思い込みがあつて。

だから彼が、ちよつとばかり脂汗をかいていても、そっち方面で緊張してるはずという油断があつて。

「じゃ、じゃあ、もっと本気で仕込んだ方がよかった？　この後食事に誘って、それがちよつと高めのイタリアンで、何故かテーブルの上にバラが一本生いけてあつて……」

「そういうの倫也くんにしてはあまりに痛々しすぎるよ吹き出しちゃうよ」

「じゃあどうすればよかったのよ俺……」

勝手に、そう解釈して。

勝手に、してやられて……

「困るよ、困る……」

「な、なんで……っ？」

……でも、本当は、そうじゃなかったのかもしれない。

だって今日は、自分の誕生日だから、”来る”としたら今日しかないって十分予測も立てられたはずで。

「だって、だって……お姉ちゃんに、笑われる」

「……ごめん何言ってるのかわからない」

けれどもし、そんなことになったら、姉に宣言した『あと二年は結婚しない』という誓

いと板挟みになるのは明白で。

「ここでOKしちゃうと、わたし、お姉ちゃんに一生からかわれ続けるんだよ？　それでいいの倫也くん？」

「え、ええと、事情話してくれないと、何とも言えないんだけど……」

だから、どんなにはっきりした兆候があつたとしても、先送りにしていただけかもしれない。

結局、自分がどうしてこの状況に陥ってしまったのか、全然、わからなくて……

※ ※ ※

六週目特典小説参照
「……と、いうわけなんだよ」

「……………ごめん事情聞いたらますます何とも言えなくなっちゃったんですけど」

それから深呼吸して。

差し出された倫也の手を、両手でぎゅっと握って。

そして恵は、先月の姉との一件を、ぽつりぽつりと、話し始めて。

……そしてやっぱり、最愛の人の理解は全然得られなくて。

「それは倫也くんが、うちのお姉ちゃんの恐ろしさを知らないからなんだよ……」

「そりゃ知らないよ。恵がなかなか会わせてくれようとしないし」

「だって、そんなことしたら、あることないこと吹き込まれるし」

本当は、あることあることを吹き込まれるだけだけれど、どちらにしてもそれは恵にとって致命的で。

「と、とにかく、まだ会社のことが心配だから、今結婚するのは困る、と？」

「う……ん」

けれどしばらくして、ようやく、ものすごく意気消沈した表情の倫也が、ぽつりと恵に話り掛け。

「けれど、二年後なら、ちゃんと前向きに検討してくれる、と？」

「う……」

「そっか、二年かぁ……ちょっと長いなぁ……」

「そ、その……」

そしてその言葉を受ける恵の返事は、倫也以上に齒切れが悪く。

「で、でも、それが恵の望みなら……」

「ちよっと待ってよまさか待つつもりなの？」

「本当にどうすりゃいいの俺!？」

ついでに往生際も悪く。

「じゃ、じゃあ、こうしよう？ とりあえず今日は保留ってことで。後日、頭を冷やして考えようってことで……」

「だからぁ、そういうふうには、すぐ結論出しちゃうのはどうかと思うんだけどなぁ」

「いや保留って結論出さないってことなんだけど」

「それって、保留するかしないかをすぐ決めろってことだよね？ やっぱり酷いよ……」

「い、いや、はは……ごめん」

「……何で笑ってるの？」

「だから、ごめんって」

でも、そんな往生際の悪い、駄々っ子みtainな恵が、倫也には、もう、懐かしくて愛おしくて。

だって、今の恵は、あのときの、恵だから。

自分が、この女性に対する好意を完全に自覚した、あのときの、恵だから。

自分の気持ちが抑えきれなくて、どうしようもなくなってしまったのに、必死にいつものフラットに戻そうとして、完全に挙動不審に除る、七年前の、ある冬の夜の、恵だから。

「なら、保留はなしってことで、いい？」

「……いい」

倫也は、少し膝を折^{ひざ}って。

恵は、少し背伸びをして。

「今すぐ、返事、してくれる？」

「……する」

二人は、二つんと、額をくっつけて。

「それじゃ、恵」

「う、うん……」

「…………」

「えーと、えーと……」

「…………」

「んーと……」

「……おい」

あとほんの少しで唇がくっついてしまいそうな距離で。

女の子に戻ってしまった彼女は、それでも、必死で、勿体^{もったい}ぶって。

「あ、あなたは、あなたはね……」

あなたは、わたしにとって、勿体ないひとだなんて、思わないけれど。

わたしは、あなたにとって、ふつつかものだなんて、思わないけれど。

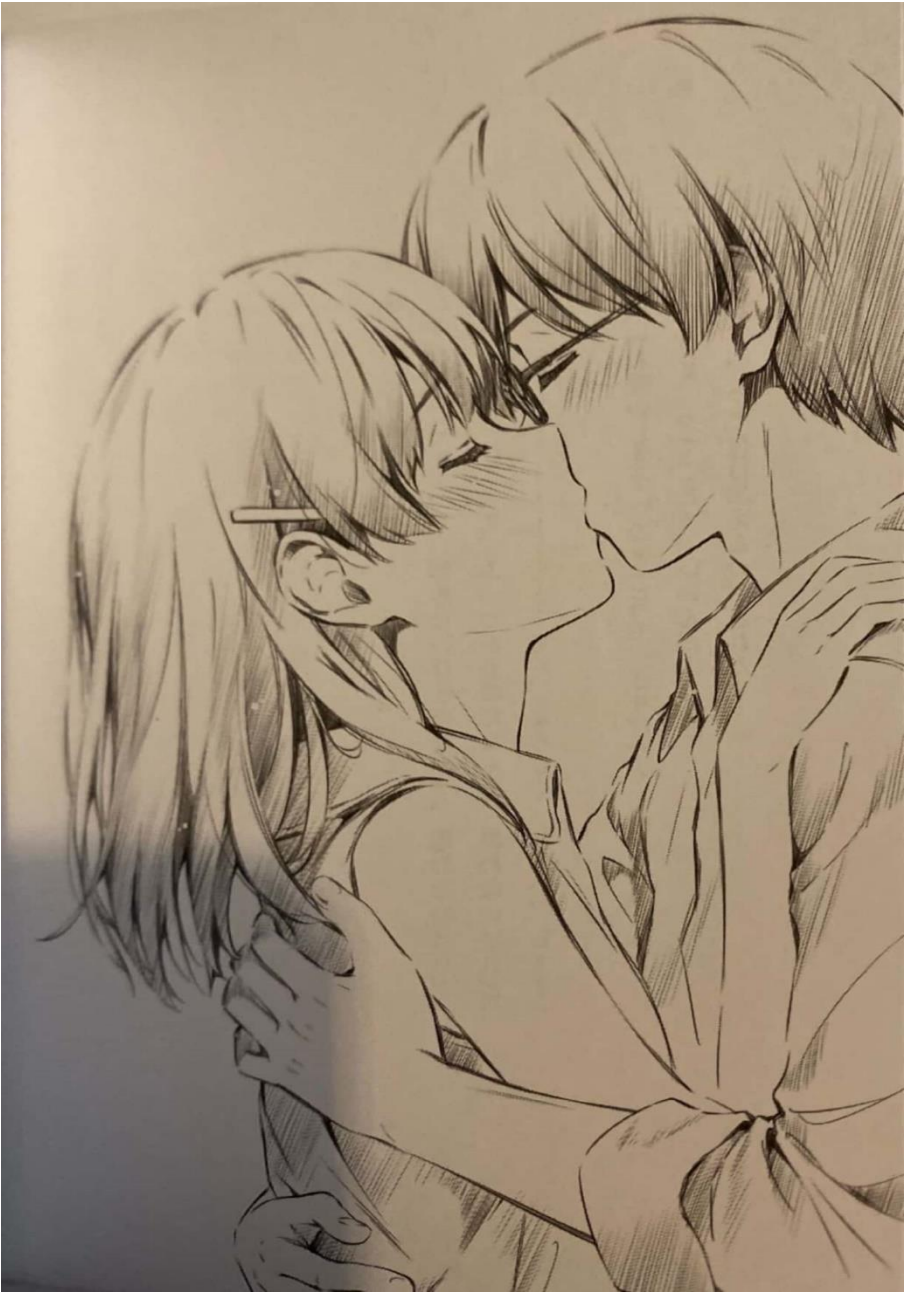
……でも、よろしく、お願い、します」

最後の、『お願いします』のところで、さりげなく、唇に、触れて。

「……………OK、ってことで、いいんだよね？」

「あ、末永く、って付け加えるの、忘れた……」

「っ……………恵！」



「んう……………」

そして、堰^{せき}を切ったように、激しく唇^{くちびる}を絡ませて。

長い長いくちづけの後も、彼の激情はおさまらず。

柔らかな彼女の身体を、思う存分、自分の身体に絡ませて。

「…………とりあえず、抱きしめるのに飽きたら、さ」

「ん？」

「その指輪、わたしに、嵌^はめてよね？」

だから、身動きの取れない彼女は、口だけを動かして、抵抗する。

「一時間くらい後になると思うけど、いい？」

「もう……」

それでも、抵抗が無駄だってわかると、呆れたような涙声とともに、全身の力を、全身全霊で、抜いて。

「どんだけ、わたしのこと好きなの、倫也くん」

「……ごめん」

『どんだけ、このひとのこと、好きなの、わたし』

「……やっぱり、さ、わたし、さ」

「ん？」

「ずっとずっと、冴えないヒロインの、ままだったね」

「何だよ、それ……」

こんなにも、彼に対しての愛情が駄々洩^{だだも}れになってしまう自分に、心底呆れて。
恵は、満面の笑顔で、心の底からの、最高の、ため息を、ついてみせる。

「もう、なんだかなあ、だよね……っ」